

松尾芭蕉『おくのほそ道』

〈立石寺〉

山形領に**※立石寺**と云山寺あり。**※慈覚大師**の開基にして、殊清閑の地也。一見すべきよし、人々のすゝむるに依て、尾花沢より**※とつて返し**、其間七里ばかり也。日いまだ暮ず。麓の坊に宿かり置いて、**※山上の堂**にのぼる。岩に巖を重て山とし、松柏年旧、土石老て苔滑に、**※岩上の院**々扉を閉て、物の音きこえず。**※岸**をめぐり、岩を這て、仏閣を拝し、佳景寂寞として心すみ行のみおぼゆ。

※閑さや岩にしみ入蟬の声

(萩原恭男校注『芭蕉 おくのほそ道』岩波文庫 pp.45-46)

※立石寺 山形市山寺にある天台宗宝珠山立石寺。貞観二年（八六〇）開基。↓菅菰抄

※慈覚大師 ↓菅菰抄

※とつて返し 予定とは違つて南下したこと。わざわざ後へ戻つたとの意をこめている。

※山上の堂 如法堂・釈迦堂・開山堂・五大堂など。

※岩上の院々 観明院・性相院など山上の十二院。

※岸 岸は崖。↓菅菰抄

※閑さや岩にしみ入る蟬の声 あたりは静寂そのものである。岩にしみ入るような蟬の声は山寺の静けさを一層深く感じさせる。孤独感を余情としている。